

上田城シンポジウムに参加して

成澤文和（4組）

10月29日（日）、上田のサントミュージアムにて開催された“上田城シンポジウム 2023”に参加した。当日は同館大ホールに800名強の聴衆が集まった。

午前中は紅葉が始まった上田城址公園～上田高校近辺を散策した。

筆者が4年前に母校を訪れたときは、堀の水位が下がり藻が繁殖していたが、創立120周年記念事業の一環として堀の環境改善がなされた結果、堀に景色が映りこむほど水質が改善されており、訪れた甲斐があった。

シンポジウムは平山優氏（歴史学者、NHK大河ドラマ「真田丸」や「どうする家康」の時代考証担当）による「上田城の魅力と謎—真田氏から仙石氏そして藤井松平氏へ」の基調講演があった。



秋の景色が映り込む母校のお堀

1582年6月の本能寺の変により、旧武田家遺領をめぐる天正壬午の乱が勃発し信州も北条・徳川・上杉による草刈り場となった。

真田昌幸も北条から徳川へと鞍替えしていたので、上田城は上杉景勝が支配する虚空蔵山城（上塩尻より登る1077メートルの山城）に対する備えとして、徳川より援助を受けて昌幸が1583年に城普請を行った。

沼田領等の帰属を巡り、1585年、第一次上田合戦が起こり、徳川軍を撃退したが、合戦後上田城は豊臣氏の影響を受けて（金箔瓦の出土）3層の天主は存在したのではないかと平山氏は推測するとのことであった。

1600年、第二次上田合戦のあと徳川により城は徹底的に破却され、真田信之は1622年まで上田城を復興せず、松代に移封となった。

全国の城郭の中で、二度も徳川の大軍を撃退した城は全国でも例がないのも魅力の一つでしょう。

小諸より仙石忠政が入封され城は再建されたが、これが現在の上田城で寛永時代の面影を色濃く残す貴重な存在となっていると平山氏は述べている。

1706年、出石の松平氏と所領交代となる。

幕末には本丸に櫓門2基と櫓7基があったが、現在残存していない4基の櫓と1基の櫓門、更に土塀の復元を目指している（来年の3月まで総額500万円の懸賞金制度を設けて古写真等の資料を探しているがいまだ見つからず）が国の史跡であるため建築には文化庁の許可が必要。

外観を限りなく近づける復元的整備により（西櫓を参考に）進めるか、今後の課題となっている（上田市櫓復元推進室長、和根崎剛氏 86期による）。



仙石氏（寛永期）時代の本丸復元模型
（上田市観光協会に展示）

（2023年11月3日記）

以上